

明治大正期に於ける富山県宇奈月温泉の研究(2)

— 温泉関連史料及び新聞史料の検討を中心に —

富 澤 一 弘・若 林 秀 行

Study on Modern Unazuki Onsen in Toyama Prefecture (2)

Tomizawa Kazuhiro Wakabayashi Hideyuki

Summary

Unazuki Onsen is currently the biggest hot spring resort in Toyama prefecture.

Unazuki Onsen is located as the gateway to Kurobe Canyon, which boasts Japan's premier glorious view, and is the earliest hot spring resort having been developed in Toyama prefecture with a major investment.

Unazuki Onsen is a relatively new hot spring resort and the opening was in year 13 of the Taisho Era (1924). Before then, many hot springs were scattered in Kurobe Canyon and each of them was doing small business. However, all of them were so hard to access that only the neighborhood residents use them.

There were many plans to pipe hot spring water from the sources in the canyon to villages downstream and to run hot spring hotels there. However, all the plans ended up in failure due to financial and technical obstacles.

Those obstacles were solved by the development of power resources in the Kurobe river accompanied by development of tourism in Kurobe Canyon and of Unazuki Onsen with a lot of capital invested by Tokyo Aluminium Corp. and Japan Electric Powers Corp.

The purpose of this article is to look at the history of Unazuki Onsen from beginning of the Meiji Era when small hot spring spots were scattered in Kurobe canyon to beginning of the Showa Era when Unazuki Onsen was opened and the spa business began to take firm root by reviewing newspaper articles and historical data of relevant companies.

第3章 愛本温泉の経営

史料16

■愛本温泉■

□下新川郡下立村の福井重斯氏社長に全郡青木村川原久作氏を常務取締役役に元二見温泉主草野武平氏等を取締役として資本金十三萬五千圓を支出し更に今回二萬五千圓を追加し総計十五萬圓を投じたる愛本温泉は院線三日市驛より愛本橋畔迄人車或は馬車の便あり愛本橋端より更に坦々たる道路約一里人力車にて温泉玄關に横付けとなる（中略）

□客室は紳士客は本館内にあり普通客の爲め別に數棟建設せられ昨今の浴客六百名客室不足の爲め仮小屋を建設し居れる有様なり

□同温泉二里先なる黒薙より湧出する靈湯を木管にて引きたるものにして温泉場は華氏二百六度より愛本の浴場へは滝の如く落下し来りて猶百十度の温度を保ち入浴に快適す

□温泉の効能は疝癰、麻病、神経痛、胃病、咽頭病、貧血病、匂癩病にして本館の紳士客に對しては湯賃間貸夜具代等一人三十五錢その他飲食向は客の望みに依り料理方に於て注文に應じ普通客の方は湯賃間貸夜具代等二十錢内外自炊器具等も貸付け居り又紳士客に対する數名の仲居もありて遺憾なく特に舟見町西天樓本支店と特約しあり無線電話を利用せば何時にても藝妓を招ぶを得山中ながらも晝夜弦歌の声絶へず都人士の一浴を試むるに絶好の場所たり

□此の附近には黒薙温泉二見温泉鐘釣温泉あり又泊町には小川温泉あり此等各温泉の間には無軌道の電車を敷設せんとするの計畫もあり愈々電車にして運轉すること、ならんには石川縣の山中山代栗津等と全様温泉巡りに便利となり世界的の温泉たるも近き將來にあるべし

（「北陸政報」 大正6年8月8日3面）

この史料は大正6年6月15日に開湯した愛本温泉を紹介した新聞記事である。これによれば愛本温泉は下新川郡下立村の福井重斯を社長に、青木村の川原久作を常務取締役に、更に元二見温泉主草野武平氏等を取締役にした資本金15万円の組織であり、北陸線の三日市駅より愛本橋まで人力車、馬車の便があり、更に橋から温泉までは平坦な道があり人力車が通行可能であるとされており、それまでの徒歩で向かうしか交通手段の無かった黒部峡谷内の温泉と比較すると格段に交通の便が良くなっていたことが分かる。

また紳士客（旅籠賄の入浴客）のための客舎と普通客（貸間自炊の入浴客）のための客舎の両方を準備しており、様々な客層の人々の需用に応える準備をしていたことがわかる。

さらに舟見町の西天樓本支店と特約があり、無線電話で連絡することで何時でも芸妓を呼ぶことが可能であるなど、様々なサービスを準備していたことが分かる。

この様に愛本温泉はその創立当初から湯治目的以外の客層を呼び寄せるための経営戦略を採って

おり、こうした点は後の宇奈月温泉へと繋がっているものと考えられる。

史料17

●愛本ホテル

□十萬圓の資本金で

下新川郡愛本温泉は最も眺望絶佳なる好位置にあるか富山市有志は全地に高等温泉旅館の經營を目的とし資本金十萬圓を以て組織したる株式會社愛本ホテルの創立總會を去る拾五日當市櫻街水月樓に於て開く出席株主八十四名創立委員長は廣田傳次郎氏を坐長とし廣田發起人の創立經過報告ありて後定款の變更其他を規定し役員は詮衡委員に依り左の如く選舉したり

△取締役廣田傳次郎（社長）（中略）

因に全社は目下鋭意新築工事中の由なれば遅くも明年五月開館式を舉行する筈

（「富山新報」大正8年11月29日3面）

この史料は愛本ホテルの建設に関する新聞記事である。記事によれば、この愛本ホテルは富山市内の旅館業を営んでいる有志が計画したもので、資本金は10万円であり、それまでの富山県内にあった温泉の宿泊施設とは異なり、貸間自炊の客ではなく、観光を目的とした貴賓客を対象とした施設であった。

史料18

愛本温泉の冬季開業

熱泉の湧出が豊富になった

天下の奇勝として誇るべき黒部峡谷の愛本温泉にては此程重役會を開き冬期開業の件及源泉地掘鑿の件其他營業上に關する件に就て種々協議を遂げ直に實行すべく決し

◇目下準備中なるが全温泉は源泉地より約三里の溪谷を木管にて引湯しある爲め湧源地にては二百〇六度の熱泉なるも途中にて冷却する處から冬期開湯する能はざりしが本春湧源地を掘鑿したる結果多量の熱泉を湧出したる爲昨今初冬の候と雖も何等温度に變化なく入浴し得るより温泉當事者も大に喜び更に源泉地を掘鑿する事に決したるものにて従來は冬期閉鎖し居たるものなるが本年より新に各種の設備を完全に施して

◇開湯する筈なれば雄大なる黒部峡谷の冬景色も面白かるべく昨今は滿山の紅葉錦を飾つて處々緑葉樹の繁茂せる眺め恰も光琳の畫を其儘に見るが如く冬籠もり旁全温泉に保養を試みるもの定めし多かるべく殊に三日市驛より愛本村まで定期乗合自動車の運轉もあれば浴場の便宜も多大なるべし因に明春三四月頃より富山市實業家連の組織に係る資本金十萬圓の愛本温泉ホテルも全温泉附近に開業し内湯の設備を爲して北陸唯一の模範的

◇温泉旅館を經營すべく過般來敷地其他の準備中なりと云ふ（後略）

(「富山新報」大正8年12月8日3面)

この記事は大正8年12月8日に新聞紙上に掲載されたものである。記事中にもあるように愛本温泉は源泉である二見温泉より木製の引湯管を利用して3里の距離を引き湯して来た温泉であるため、冬の間は途中で冷却され、湯温が低下することから冬季中は営業を行っていなかったが、大正8年の春に源泉地を掘削したところ大量の熱泉が湧出し、それによって冬季にも湯温が低下することが無くなり温泉を一年中営業することが可能になったということである。

また大正6年当時は三日市駅・泊駅からの交通手段は人力車と馬車しかなかったが、大正8年になると乗合自動車という新たな交通手段が登場しており、また先述の愛本ホテルも翌年に開業を予定しており愛本温泉は更なる発展が見込まれていた。

愛本ホテルは大正9年7月26日より営業を開始している。以下の史料はその愛本ホテルの広告である。

史料19

◎天下の靈泉に浴されよ

黒部峡谷の風景は世界的に紹介されたる絶景地たると全時に黒部峡谷から湧き出づる靈泉愛本温泉も今や世界的に紹介されました。

富山縣下三日市驛から三里餘自動車の便に依り黒部川の西岸に沿ふて愛本温泉場に到着する、柔らかな感じのする山々の色合が温泉場に尤も應はしい自然であり、遠く望めば安立山の城跡に翠緑あり、直下には黒部川の碧澤藍の如く、夜は其の綜々たる音が枕に通つて来る、如斯天與の温泉場は又とない嘆称さるゝも決して偶然ではありません、

愛本温泉の特効は

一、胃腸病、生殖器病、疝氣、逆上、リウマチス、皮膚病、神経痛等に特効あり

●今其の一二の實例を上げれば

一、胃腸病は如何なる慢性でも此の靈泉に依つて全治されたる幾多の實例があります

一、五箇年以上も妊娠されなかつた御婦人が二週間の入浴で子寶を設けられたと云ふ實例は幾人もあります

一、子宮病、癩病、リウマチス、皮膚病、なぞ全快になつた實例之れ澤山にあります

愈々湯治の期節となりましたから今度弊館が此の靈泉に浴されんとする御湯治客様方の利便と満足を計りたい希望から左記の通り殆ど實費全様大勉強をする事と致しましたから、どうぞ御誘ひ遊ばされ御來湯の程只管御待ち致して居ります、

●一週間以上御滞在の御客様方の●

御宿泊料

一、金貳圓五拾錢 御一泊(晝食共)

一、金参圓五拾錢 御一泊 (晝食共)

●家族湯ノ設備モアリ

越中愛本温泉場

愛本ホテル

◎効能眞に顕著

(「富山新報」大正9年9月14日1面)

この広告を見ると、温泉が様々な効能を持っていることが、強調されていることがわかる。ここに挙げられている様々な病気の治療に関する実例が真実であるのかは検討する手段は無いが、この様に効能を強調するということは愛本ホテルが狙っている客層は短期間しか温泉に滞在しない観光目的の客ではなく、湯治を目的とした1週間以上滞在する客層であったことがわかる。しかしその料金体系は、先述した大正6年の時点の愛本温泉の紳士客向け客舎の湯賃間貸夜具代等1人35銭に対して、1泊2円50銭及び3円50銭(共に賄・昼食つき)と経済状態の変化を考慮しても高水準になっており、愛本ホテルは隣接する愛本温泉と比較してより上層の人々を対象とした高級な旅館であったことがわかる。

この様に愛本温泉は、当時の富山県内のどの温泉にも存在していなかった高級旅館が建設されるなど、富山県を代表する一大温泉地として発展してゆく可能性を持った温泉地であった。

しかし、愛本温泉はこの数年後に宇奈月温泉を経営する黒部鉄道株式会社に買収されることになるのである。

第4章 宇奈月温泉の成立

次の史料は『宇奈月温泉由來』の愛本温泉に関して書かれた部分である。

史料20

愛本温泉

前述のように黒部川流域には澤山の温泉があるが何れも交通不便で全然行く事の出来ない所か又は行かれるにしても數里の山道を歩かねばならず夏だけであって冬期は全然近づけない。之を何とかして人里近い所に引き四季いつでも入れるようにしたいと云う目的で大正四年富山市の旅館高沢藤吉氏外の有志により愛本温泉株式會社(資本二十萬圓)が設立された。(中略)此場所は温泉場として繁榮するかに見えたが不幸にして其の頃から段々と湯が冷え始め年中大部分は加熱しなければ入れないようになり浴客も減少し缺損状態となつた所に、十年には暴風により一棟倒壊し一層經營困難を加えた。

(『宇奈月温泉由來』13~15頁)

史料によれば、大正8年に営業を開始した愛本温泉には、当初は多くの入浴客で賑わい、一日に800人もの人々が訪れることもあったが、年月が経過すると引き湯してくる湯の温度が低下し始め、徐々に入浴客が減少し大正10年には暴風雨によって建物が一棟倒壊し経営困難に陥ったということである。

『宇奈月温泉由來』には大正10年当時の愛本温泉の様子が描かれている。

史料21

十年の冬と思うが或る時此温泉に到着し浴場に行くとガランとした大浴場の一角に小さな掘風呂があつて二三人の人が入つて居つた經營者の高沢藤吉君も其一人であつたと思う。

則冷却した温泉を再び沸かして入つて居るのだ。

(『宇奈月温泉由來』15頁)

冬期も営業を行う事を決定し、大々的に規模を拡大した温泉の状況としては余りにも寂しいものであるが、当時の人々は、温泉入浴に際してその効能と共に湯の温度を重要視しており、この様に湯温の低下した温泉は利用しにくかったものと考えられる。

表1 黒薙温泉の入浴者数

| 大正11年 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 計 | 累計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 4月 | | | 4 | 4 | 4 |
| 5月 | 23 | 45 | 38 | 106 | 110 |
| 6月 | 122 | 155 | 262 | 539 | 649 |
| 7月 | 237 | 443 | 967 | 1,647 | 2,296 |
| 8月 | 1,171 | 1,003 | 1,274 | 2,448 | 4,744 |
| 9月 | 461 | 355 | 270 | 1,086 | 5,830 |
| 10月 | 243 | 249 | 128 | 620 | 6,450 |
| 11月 | 128 | 124 | | 252 | 6,702 |
| 大正12年 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 計 | 累計 |
| 5月 | 25 | 114 | 140 | 309 | 309 |
| 6月 | 244 | 191 | 165 | 600 | 909 |
| 7月 | 156 | 202 | 590 | 948 | 1,857 |
| 8月 | 929 | 1,236 | 1,171 | 3,336 | 5,193 |
| 9月 | 306 | 171 | 150 | 627 | 5,820 |
| 10月 | 252 | 152 | 184 | 588 | 6,408 |
| 11月 | 55 | 39 | | 94 | 6,502 |

* 「東洋アルミニウム会社電源開発記録」より作成。

表2 愛本温泉の入浴者数

| 大正11年 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 |
|-------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| 上旬 | | 132 | 635 | 286 | 255 | 192 |
| 中旬 | | 494 | 1,143 | 230 | 168 | |
| 下旬 | 219 | 477 | 1,259 | 176 | 176 | |
| 計 | 219 | 1,101 | 3,037 | 692 | 599 | 192 |
| 累計 | 219 | 1,320 | 4,357 | 5,049 | 5,648 | 5,840 |

* 「東洋アルミニウム会社電源開発記録」より作成。

表1、表2は、この大正12年の黒難温泉、及び愛本温泉の入浴者数についてのものであるが、これを見ると、大正12年の愛本温泉は、交通の便が格段によいにもかかわらず、黒部峡谷の奥にある黒難温泉より入浴者が少ないことがわかる。

この後大正11年に、黒部川を利用して電源開発を行っていた東洋アルミニウム株式会社が、黒難温泉を2万円で買収した際に、経営困難に陥っていた愛本温泉株式会社は同社に買収を申し入れ、約6万円で温泉の権利を譲渡している。その後鐘釣温泉も同社に温泉経営権を売却し、同社が黒部峡谷内の主要な温泉の経営権を手に入れることに成った。^(註10)

次の史料22～24は大正11年に設立された黒部温泉株式会社の設立趣意書である。

史料22

黒部温泉株式會社設立趣意書

◎黒部温泉 黒部川附近に湧出する温泉の諸病に偉効あるは既に定評あり、泉質は別表の如くにして無色透明悪臭なく一浴爽快健康者も更に元氣勇躍を禁せさらしむ。加ふるに黒部溪谷の雄大な山嶽中に介在し空氣新鮮氣候温和に理想的療養地にして又無比の遊覽地たり

◎交通の改善 黒部溪谷は斯の如き好温泉地帯なるにも拘らず従来繁榮せさりしは其經營の方法宣しきを得さりしこと及交通不便なりしに依るものにして(中略)然るに昨秋黒部鐵道株式會社設立せられ省線三日市驛より黒部沿岸に電氣鐵道の敷設せられんとするは黒部温泉の福音と稱すべく、今や黒部鐵道株式會社は用地の買収を了し三日市驛より内山村に至る八哩は本年九月迄に開通の豫定を以て工事進涉中にあり、大正十二年夏期迄には更に宇奈月迄開通の豫定にして、更に爾后、愛本間の新線に着手す可く、即黒部鐵道は各温泉地を完全に連結し交通の状況を全く一新せんとす。

(『黒部温泉株式會社設立趣意書』)

史料中の下線部にあるように、黒部溪谷は、温泉資源に恵まれた上に風光明媚な土地であるにも拘らず、従来繁榮してこなかったのは、交通機関に不備があるためであり、前年の秋より黒部鐵道株式会社によって、北陸線の三日市驛より黒部川の沿岸に電氣鐵道が愛本まで敷設され、その後宇奈月まで延長される計画が実行されたことは、黒部溪谷が発展する画期になるであろうことが述べられている。

史料23

◎引湯線の改築 従来愛本温泉の成績良好ならさりしは引湯線の工事不完全にして温泉の温度低下し一年中大部分加熱を要するを最大原因なりとす。然るに泉源は常に二百度の高温を有し従來の如く冷却するは全く引湯線路の不完全なるに依るものにして、發起人は東洋アルミナム會社の技術部に依嘱し調査せしに引湯線を改良せは年中適度の温泉を誘導し得可き事を確め、目

下之か改良法に就き研究中なるか左程多額の工事費を要せずして充分改良し得へき成算を得たり。且又新會社は愛本黒薙二見三温泉の泉源の権利を有し是等三泉は殆全一の場所にあり是等を統一せば湯量の配給も頗る自由にして従來に比し新面目を有せしむる事容易なり。

(『黒部温泉株式會社設立趣意書』)

史料23では、従来愛本温泉の成績が好調ではなかったのは、引湯線の工事に不良箇所があり、そのために温泉の温度が低下し、一年中加熱する必要があったことが原因であるが、黒部温泉株式会社では、この点を改良してあるので、年中適度な温度の温泉を引くことが可能であるとしている。

史料24

◎本社の計畫 交通状況前途の如く一變せんとし引湯法右の如く改善せられんとす今若温泉營業の方法改善せらるれば其繁榮を見ること期して待つ可し。

發起人等は昨年解散したる愛本温泉株式會社關係者と交渉し割安の價格を以て其權利及財産の一切を継承し、又全時に黒薙二見兩温泉主の好意により兩温泉の權利及財産一切を譲り受け、是等を合併して黒部温泉株式會社を創立し黒部鐵道株式會社と協調し各温泉を經營せんとす。

◎事業の概要 従来愛本及黒薙兩温泉の収容客数は約千人なるか夏期盛時には千三百人以上を宿泊せしむるを常とし常に客舎の不足を感じたり。鐵道開通の暁には浴客激増す可きは明にして、此兩温泉にては収容し得ざる盛況を呈す可き事疑なきを以て、兩所の設備を改善すると全時に二見温泉を復舊し更に宇奈月の勝地に理想的新温泉を開湯せんとす。即主なる計畫次の如し

- 一、黒薙湯 従來の建物を基とし改善を施し經營す
- 二、二見湯 家屋復舊及増築を爲し十二年度より開湯す
- 三、愛本湯 黒薙、愛本間引湯樋の改修（本年内に改修）従來の建物を復舊改善して經營す
- 四、宇奈月湯の開始 宇奈月臺沿川第一の好遊覽地なり、且黒部鐵道も此地を終點とするを以て此所に新湯を開き旅宿別荘地貸別荘、遊園地其他各種の文化的設備を完備し、黒部鐵道と共力經營し理想的温泉地を作らんとす

(『黒部温泉株式會社設立趣意書』)

史料24では、交通機関が改善され、引湯管が改良され、黒部温泉株式会社の手によって、温泉營業の方法が改善されるならば、温泉が繁榮することは確実であるとしており、権利を有する温泉の經營計画としては、①黒薙温泉は従來の建物を基に改善を施して經營を行う、②二見温泉は家屋を復旧及び増築し大正12年度より營業を再開する、③愛本温泉は温泉までの引湯管を回収し、従來の施設を復旧改善して營業を行う、④黒部鐵道の終点である宇奈月台に新しい温泉場を開き、旅館・別荘・貸別荘、遊園地その他の娛樂施設を建設し黒部鐵道と共同經營して理想的な温泉地とするというものであった。

こうして東洋アルミニウム株式会社による宇奈月温泉の開発が開始されたが、同社による温泉開発の背景には、同社の黒部峡谷の電力開発の基地が宇奈月にあったものの、同所は冬季には交通が途絶するような場所であり、ここを基地とするためには社員の娯楽厚生施設が必要であったことがある。さらに工事中の物資の運搬のために計画された黒部鉄道は、本来なら工事専用軌道として竣工するはずのものであったが公共交通機関が未発達であった周辺地域の住民の要望で一般営業の通常鉄道として竣工した。しかし周辺住民の利用だけで採算が合うはずが無く、宇奈月の地に温泉を建設することでその入浴者による黒部鉄道の乗客増加を見込むことができたのである。(註11)

宇奈月温泉へは黒薙温泉から、愛本温泉への木樋に沿って引き湯管が設置され、大正12年11月に宇奈月温泉への引き湯に成功している。(註12)

大正11年2月に黒薙、愛本両温泉を買収し宇奈月への温泉建設計画のための用地買収を開始した東洋アルミニウム株式会社は、当初5万坪の用地を買収する計画であったものの、同社の本業であるアルミニウム製造計画に支障が出たことから、新事業を一旦中止せざるを得なくなり、用地買収は当初の予定の半分である2万5,000坪で打ち切りとなった。その後大正13年5月に黒部温泉株式会社を買収し、黒部峡谷の電源事業を受け継いだ、日本電力により宇奈月温泉開発は継承され、道路、遊園、旅館、別荘、売店街の分譲地を定め工事にとりかかった。(註13)

大正12年には引き湯線工事、宇奈月温泉地道路、水道下水工事等が実施され、愛本温泉の宿舍2棟及び大浴場や愛本ホテルが宇奈月の地に移転された。更に黒部鉄道も11月に宇奈月まで開通し宇奈月温泉場の形態が整った。(註14)

次の史料は、この日本電力により開発されている途中の宇奈月温泉に富山新報の記者が滞在した際の記事である。

史料25

神秘の峡谷黒部行き (一)

特置菖蒲田生

(前略) 終點の宇奈月平にて黒部鐵道會社の經營にかゝる愛本温泉まで黒薙二見の二温泉を二里の間引湯し來りたる著名な温泉場がある旅館部と貸間部の二棟が既に竣工して目下浴場室の工事中であるが温泉を中心としてホテル、旅館、料理店、運送店、賣店、別荘等何れも盛に工事中で今月中には何れも竣工せしむべき相競ふて火事場のやうに大活動を始めて居る浴室は何れも満員の盛況で日々激増し來る顧客を收容すると煩悶して居る

別荘で出來上がったのは谷欽太郎氏の一棟で(中略)引湯もしてあれば清涼掬すべき飲料水も湧き出て居るので深山気分の漂ふてゐる仙境に原始的にして大なる自然文明の濁つた空氣の及ばぬ純潔な自然の懷に抱かれて吾人は暫し悠々たる自由の靈境に逍遙するには屈境の處である(後略)

(「富山新報」大正13年7月18日3面)

大正13年7月18日の段階で、宇奈月温泉は、ホテル、旅館、料理店、運送店、売店、別荘等が何れも完成間近であり、また既に完成していた谷欽太郎所有の別荘内には、温泉の引湯があったことがわかる。

このように宇奈月温泉は当初から温泉街を建設することを計画した大規模な温泉開発計画であったことがわかる。しかしながら温泉街の分譲開始当初は中々宇奈月へ進出するものがなく、当初は黒部温泉開発会社の直営の宇奈月館のみが営業を行った。その後、同社が宇奈月へ進出する旅館業者に3万円の資金を貸付けることを決定したところ、延對寺別館及び富山館が新築を始めて14年に開業し、その後多数の旅館売店等が出店し宇奈月温泉は発展していったのである。(註15)

表3 昭和8年 北陸地方の温泉の入浴客数

| 温泉名 | 山中温泉 | 山代温泉 | 片山津温泉 | 粟津温泉 | 和倉温泉 | 芦原温泉 | 小川温泉 | 宇奈月温泉 |
|-----|---------|--------|--------|------|------|------|--------|--------|
| 1月 | 8,675 | 5,698 | 8,584 | 不明 | 不明 | 不明 | 5,325 | 3,048 |
| 2月 | 12,432 | 5,885 | 8,408 | | | | 6,093 | 2,850 |
| 3月 | 10,662 | 6,089 | 6,136 | | | | 2,582 | 1,771 |
| 4月 | 10,443 | 4,955 | 6,622 | | | | 2,503 | 2,039 |
| 5月 | 11,639 | 3,802 | 7,028 | | | | 4,533 | 3,980 |
| 6月 | 12,044 | 3,502 | 6,347 | | | | 4,962 | 5,242 |
| 7月 | 6,061 | 2,403 | 5,463 | | | | 3,577 | 4,673 |
| 8月 | 10,549 | 3,492 | 6,973 | | | | 12,841 | 8,741 |
| 9月 | 8,158 | 2,267 | 5,931 | | | | 4,325 | 3,816 |
| 10月 | 8,268 | 3,580 | 6,252 | | | | 5,814 | 5,613 |
| 11月 | 8,651 | 3,686 | 5,961 | | | | 6,058 | 5,358 |
| 12月 | 4,929 | 2,267 | 4,761 | | | | 5,814 | 2,438 |
| 合計 | 112,511 | 47,626 | 78,466 | | | | 64,427 | 49,569 |

* 『温泉大鑑』(昭和8年 日本温泉協会)より作成。

表4 昭和14年 北陸地方の温泉の入浴客数

| 温泉名 | 山中温泉 | 山代温泉 | 片山津温泉 | 粟津温泉 | 和倉温泉 | 芦原温泉 | 小川温泉 | 宇奈月温泉 |
|-----|---------|--------|---------|--------|---------|---------|--------|---------|
| 1月 | 18,951 | 4,232 | 18,307 | 5,512 | 11,270 | 16,272 | 9,484 | 6,492 |
| 2月 | 27,375 | 4,873 | 17,537 | 5,882 | 13,489 | 26,260 | 6,372 | 5,360 |
| 3月 | 24,691 | 4,053 | 15,243 | 4,551 | 10,736 | 21,481 | 6,329 | 7,632 |
| 4月 | 8,449 | 4,107 | 18,314 | 4,203 | 7,453 | 22,792 | 4,317 | 6,616 |
| 5月 | 19,495 | 2,492 | 19,623 | 3,446 | 6,962 | 21,342 | 4,332 | 9,672 |
| 6月 | 15,720 | 2,885 | 16,885 | 3,000 | 7,563 | 16,905 | 3,315 | 9,796 |
| 7月 | 16,766 | 2,290 | 13,398 | 2,744 | 10,178 | 16,440 | 3,431 | 10,264 |
| 8月 | 26,377 | 3,316 | 19,270 | 3,914 | 14,128 | 18,669 | 7,985 | 18,236 |
| 9月 | 13,403 | 2,688 | 10,391 | 2,466 | 7,321 | 12,336 | 2,873 | 8,366 |
| 10月 | 13,652 | 3,966 | 16,174 | 3,252 | 6,235 | 13,883 | 4,998 | 13,192 |
| 11月 | 15,690 | 4,422 | 15,104 | 3,729 | 4,824 | 13,614 | 4,121 | 12,104 |
| 12月 | 17,533 | 2,938 | 9,032 | 2,619 | 5,134 | 10,102 | 3,416 | 6,550 |
| 合計 | 218,102 | 42,292 | 189,358 | 45,318 | 105,343 | 210,096 | 60,973 | 114,280 |

* 『日本温泉大鑑』(昭和16年 日本温泉協会)より作成。

表3・4は、日本温泉協会による『温泉大鑑』に記載されている、昭和8年と14年の北陸地方の主要な温泉の入浴者数である。

これをみると、宇奈月温泉の入浴者数は、49,569人から、114,280へと2倍以上に増加している。この時期、石川県の山中温泉は、112,511人から218,102人と約2倍に、片山津温泉は78,466人から189,358人へ約2.7倍へと何れも増加しており、一方で富山県の小川温泉や山代温泉は入浴客数が漸減している(註16)。昭和10年代は、軍需インフレなどの影響で景気は非常に良い状態であり、この時期に戦前期の観光産業は最盛期を迎えたとされているが、宇奈月温泉のように観光開発によって入浴客数が大幅に増加する温泉がある一方で、小川温泉のように相対的にこうした状況に乗り遅れた温泉は入浴客数を伸ばすことができなかつたものと考えられる(註17)。

表5 宇奈月温泉の旅館及び収容客数

| | 昭和8年 | | 昭和14年 | |
|---------|------|-------|-------|-----|
| | 室数 | 収容数 | 室数 | 収容数 |
| 宇奈月館 | 14 | 50 | 26 | 126 |
| 富山館 | 21 | 90 | 17 | 87 |
| 延對寺別館 | 27 | 100 | 27 | 138 |
| 河内館 | 26 | 100 | 42 | 195 |
| 水月旅館 | 8 | 18 | 13 | 43 |
| 坂井館 | 10 | 18 | 22 | 68 |
| 桃原館 | 11 | 25 | 17 | 40 |
| 芳友館 | 10 | 20 | 10 | 34 |
| 自炊部温泉湯元 | 130 | 1,000 | 103 | 377 |
| 金山旅館 | なし | なし | 24 | 101 |
| 旅館延楽 | なし | なし | 10 | 41 |

* 『温泉大鑑』『日本温泉大鑑』より作成。

表5は昭和8年と昭和14年の宇奈月温泉の主要な旅館の収容客数を比較したものであるが、これを見ると、昭和14年には金山旅館と旅館延楽という新旅館が進出しており、またその他の旅館も何れも収容客数が増加している。これに対して自炊部温泉湯元の室数、収容客数は何れも減少しており、これは同時期の宇奈月温泉が、次第に長期滞在を前提とした自炊客ではなく、賄い付きの旅館を利用する人々へと客層が推移しつつあったという事を示しており、昭和10年代の宇奈月温泉は他地域の大温泉と同様に、療養・保養温泉の段階から、歓楽化・観光地化しつつあったことを示しているものと考えられる。

むすびにかえて

日本有数の峡谷のひとつである、黒部峡谷の内部には、多数の温泉が湧出し、それを人々は利用してきた。しかし、黒部峡谷内部は極めて交通困難な場所であり、そこに湧出する温泉を利用でき

る人も限定的であり、近世以来何度か下流の人家のある場所に温泉を引湯する計画が立てられたものの、いずれも失敗に終わっている。

こうして黒部峡谷内の温泉は、明治20年代後半から30年代前半にかけての富山県内の温泉・海水浴場などの発展期に於いて発展を遂げることが出来ず、次第に新聞紙上等からその名前が消えていくこととなった。

その後、全国各地で鉄道資本などの外部資本による大規模な温泉開発が行われた大正後年、富山県に於いても宇奈月温泉の開発が行われた。宇奈月温泉は、当時風光明媚な景勝地として全国的に有名になりつつあった黒部峡谷探勝の一大拠点として、当初から大規模な温泉街を建設することを目的として開発が行われており、当初は出店する者が居なかったものの、昭和初期には多数の旅館が進出し、昭和10年代には既に療養温泉の段階を脱し、山中温泉や片山津温泉などとともに多数の入浴者が訪れるようになっていく。

(とみざわ かずひろ・本学経済学部教授)

わかばやし ひでゆき・本学大学院地域政策研究科博士後期課程)

【註釈】

- 註10 『宇奈月温泉由来』(山田胖 昭和31年／『黒部峡谷史料』新興出版社平成2年 収録) 16～17頁。
- 註11 『宇奈月温泉由来』(山田胖 昭和31年／『黒部峡谷史料』新興出版社平成2年 収録) 18から19頁。
- 註12 『日本歴史地名大系16 富山県の地名』(平凡社 平成6年7月) 144頁。
- 註13 『宇奈月温泉由来』(山田胖 昭和31年／『黒部峡谷史料』新興出版社平成2年 収録) 27頁。
- 註14 『日本歴史地名大系16 富山県の地名』(平凡社 平成6年7月) 144頁。
- 註15 『宇奈月温泉由来』(山田胖 昭和31年／『黒部峡谷史料』新興出版社平成2年 収録) 30頁。
- 註16 小川温泉所蔵「昭和十六年以降申請・申告・届書其他綴」によれば、小川温泉の延利用者数は昭和11年から15年までの間に50,170人、45,633人、76,288人、99,557人、114,641人と推移しており、これは『温泉大鑑』『日本温泉大鑑』の数値データと矛盾しており、また『加賀市史・通史編下巻』(加賀市史編纂委員会編 昭和54年10月) 291頁の表74掲載の石川県4温泉(山中、山代、片山津、粟津温泉)の入浴者数の数値データも『温泉大鑑』『日本温泉大鑑』とは異なっており、その原因に関する検討は今後の課題とさせて頂きたい。
- 註17 これ以降、戦時体制下の温泉地では、享楽的なサービスを行うことを規制(酒類提供の制限など)が行われ、サービス内容は低下したものの、少なくとも昭和16年までは北陸地方の各温泉地の入浴客数は増加し続けている(『加賀市史・通史編下巻』(加賀市史編纂委員会編 昭和54年10月) 291頁参照)。また、小川温泉に現存する株主総会議事録には、小川温泉に於いては昭和20年上半期までは入浴客数の増加が見られたという記述がある。

【主要参考文献・史料】

- 『富山県史』通史編5 近代上(富山県 昭和56年)。
- 『富山県史』史料編6 近代上(富山県 昭和53年)。
- 『加賀市史・通史編下巻』(加賀市史編纂委員会編 昭和54年10月)。
- 『角川日本地名大事典16 富山県』(角川書店 昭和54年10月)。
- 『日本歴史地名大系16 富山県の地名』(平凡社 平成5年7月)。
- 『観光地理学』(浅香幸雄, 山村順次 昭和49年9月)
- 『新観光地理学』(山村順次 原書房 平成16年2月)
- 『下新川史稿 上巻』(下新川郡役所 明治42年／再版 新興出版社 昭和59年)。

- 『温泉大鑑』(昭和8年 日本温泉協会)。
『日本温泉大鑑』(昭和16年 日本温泉協会)。
『黒部谿谷』(冠松次郎 昭和3年／『黒部峡谷史料』(新興出版社 平成2年7月 収録))。
『宇奈月温泉由來』(山田胖 昭和31年／『黒部峡谷史料』(新興出版社 平成2年7月 収録))。
「中越新聞」(明治17年1月18日～明治21年7月25日 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「北陸公論」(明治22年4月5日～明治23年9月14日 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「北陸政論」(明治23年9月18日～明治37年9月18日 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「北陸政報」(明治37年9月8日～大正7年8月 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「富山新報」(大正7年10月15日～昭和8年10月17日 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「北日本新聞」(昭和15年8月1日～ 富山県立図書館所蔵マイクロフィルム)。
「東洋アルミナム会社電源開発記録」(宇奈月町友学館所蔵)。
「温泉関係資料」(宇奈月町史編さん室編 宇奈月町友学館所蔵)。
「宇奈月の温泉開発①」(宇奈月町友学館所蔵)。
「宇奈月の温泉開発②」(宇奈月町友学館所蔵)。
「昭和十六年以降申請・申告・届書其他綴」(小川温泉所蔵)。

【謝辞】

前高崎経済大学附属産業研究所所長・加藤敬弘先生、様々な形で大層学恩を被りました。ここに謹んで感謝御礼申し上げますとともに、今後の御健康、御多幸を心より御祈念申し上げます。